



TITLE:

京大広報 No. 555

AUTHOR(S):

京都大学広報委員会

CITATION:

京都大学広報委員会. 京大広報 No. 555. 京大広報 2001, 555: 1023-1036

ISSUE DATE:

2001-03

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/196553>

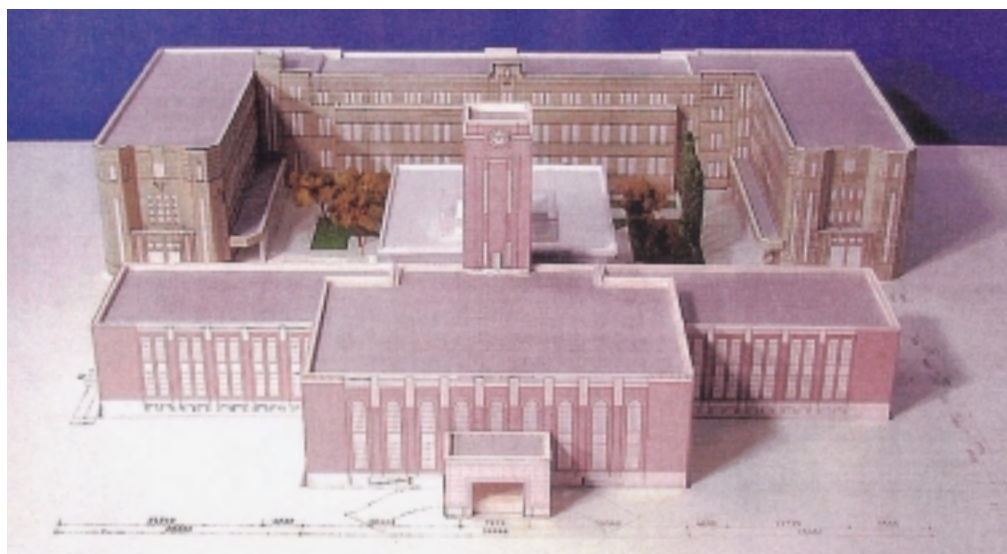
RIGHT:



京大広報

No. 555

2001 3



時計台記念館イメージ図 関連記事本文1025ページ

目次

全学に訴える - 差別落書きについて -	1024
大学の動き	
京都大学創立百周年記念	
時計台記念館計画概要について	1025
部局長の再任	1027
平成13年度入学選抜学力試験の	
第1段階選抜状況	1028
博士学位授与式	1029
日誌	1029
訃報	1030
随想	
論か、学か 名誉教授 山川裕巳	1032

洛書	
英語は一に声量、二にアクセント	
丹羽隆昭	1033
資料	
平成12年度教育実習実施状況	1033
話題	
京大大学生命情報シンポジウム「バイオ	
インフォマティクスの新展開」開催	1035
京大病院で「新春のつどい」開催	1035
お知らせ	
本部構内におけるオートバイの通行について ...	1036

全学に訴えるー差別落書きについてー

平成 13 年 2 月 16 日
京 都 大 学

昨年 12 月に教育学研究科男子便所内において、部落差別を表すビラが発見された。また、本年 1 月には、理学研究科中央図書室において、地図帳に部落差別を表す落書きのあることが判明し、更に 2 月には、農学研究科中央図書室においてガイドブックに部落差別を表す落書きのあることが判明した。

大学としては、本日付け（平成 13 年 2 月 16 日付告示第 5 号下記参照）をもって、このような行為は到底容認できないものであること、本学は、今後ともさまざまな差別解消のために一層の努力を重ねる所存であり、学生・教職員にあっては差別問題に関して自らの認識を更に深められるよう、全学に訴えたところである。

本学では、これまでも機会あるたびに差別解消のための啓発に努力しているところであるが、いまだにこのような事件があとを絶たないことは誠に遺憾である。今回の事件をひとつの試練と受け止め、今後とも人権擁護、反差別の取り組みを強めていく決意である。この際、京都大学の全構成員が、こうした差別行為に対する怒りを新たにされるとともに、人権問題全般に関する認識を深め、己の心の隅に潜んでいるかもしれない差別意識の点検を怠らぬよう、強く要望する。

告示第 5 号

昨年 12 月に教育学研究科男子便所内において、部落差別を表すビラが発見された。また、本年 1 月には、理学研究科中央図書室において、地図帳に部落差別を表す落書きのあることが判明し、更に 2 月 16 日には、農学研究科中央図書室においてガイドブックに部落差別を表す落書きのあることが判明した。

これらの悪質な行為は、誠に遺憾であり、本学としては到底容認できない。

本学は、今後ともさまざまな差別解消のため一層の努力を重ねる所存であるが、学生・教職員にあっては更に差別問題に関して自らの認識を深められることを強く望むものである。

平成 13 年 2 月 16 日

京 都 大 学

大学の動き

京都大学創立百周年記念時計台記念館計画概要について

創立百周年記念事業委員会

1月30日に開催された創立百周年記念事業委員会において、本年8月に着工予定の時計台記念館計画概要について次のとおり説明があり、了承された。なお、この時計台記念館は、平成15年3月竣工の予定である。
(URL <http://www.adm.kyoto-u.ac.jp/soumu/ku-local/tokeidai/gijiyousi.htm>)

1. 基本理念

京都大学百年の歴史を評価し、次の百年に飛躍的な進展が予想される「学術の国際化」、「異分野学問領域の交流」ならびに「社会と大学との学問的交流」に備えるため、学術情報の公開・交流を促進するインターフェイスとなる施設を京大百年を象徴する時計台の再生として構築する。

2. 京都大学大学文書館

京都帝国大学設立以来の歴史及び大学史に関する調査研究を行い、その成果である関連資料及び大学発展の歴史を展示公開する。併せて、大学設立以来の旧公文書を保存・管理する。

3. 百周年記念ホール（大ホール）

500人程度収容可能な同時通訳装置を併設した小規模な国際学会の開催にふさわしい大ホールとこれに付属する会議室を数室つくる。このホール

には国際・国内のマルチメディア情報の送受信が可能な設備を設ける。また国際・国内学会のみならず、常時は通常の研究活動や公開講座等にも使用する。

4. 国際交流ホール

大学間の国際交流が盛んとなるにつれて、公式の式典や交流、儀式を行う場所が必要となり、総長応接室では手狭な場合がしばしばおこると考えられる。これに備えるために、公式行事等を行える国際交流ホールや風格のある迎賓室を設ける。

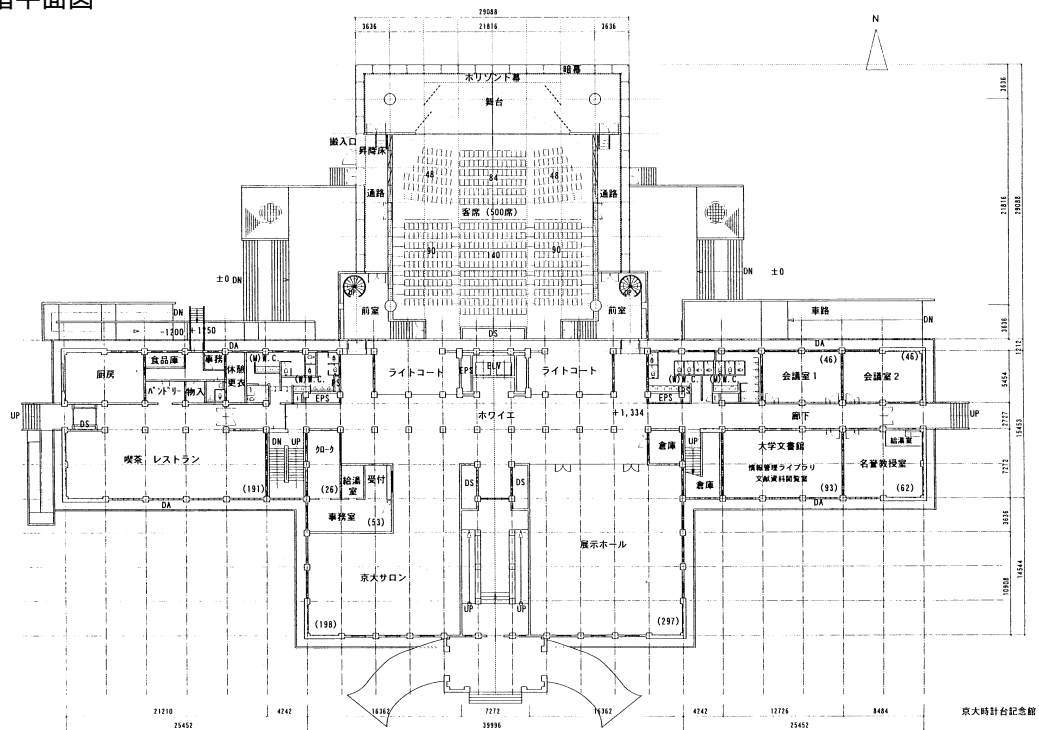
5. 京大サロン

異分野領域の教官及び教官と学生が自由に接触できる場として、京大サロン、レストラン・喫茶を設ける。この施設は同窓生・名誉教授・元教職員にも開放し、京都大学教職員の交流の場として活用する。

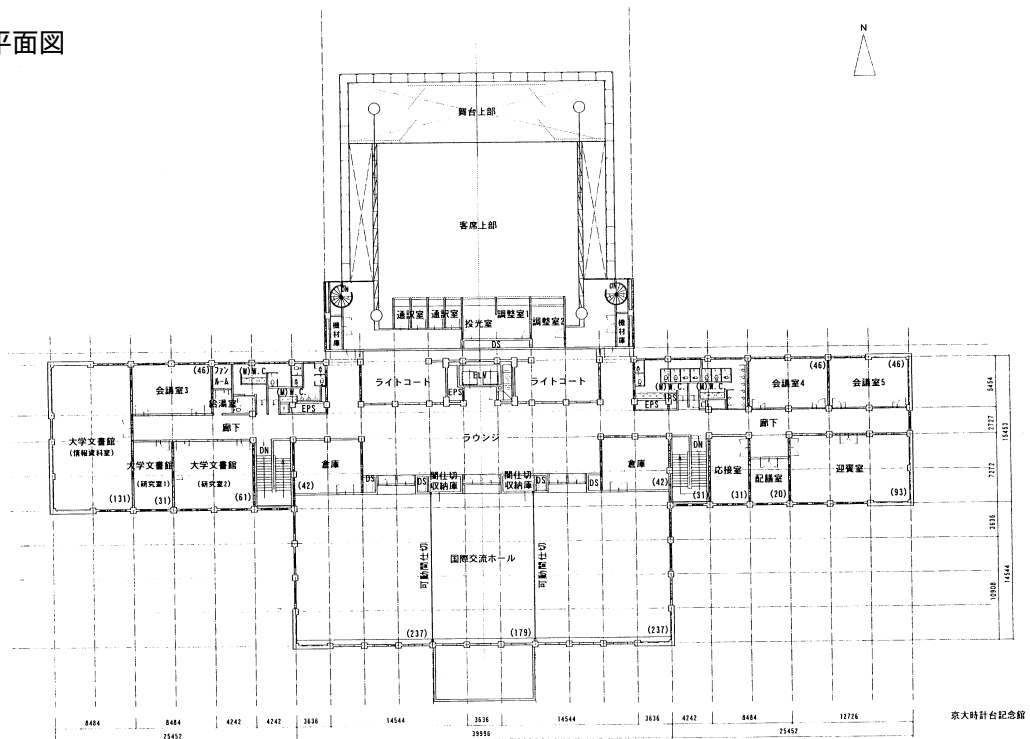
主な施設

階	室 名	用 途
1 階	展示ホール	百年史及び大学史に関する資料等を展示公開
	京大サロン	異分野の教官や名誉教授が自由に交流する場
	大ホール	国際・国内学会、講演会
	受付・事務室	受付案内・大学文書館事務室
	大学文書館	情報管理ライブラリー、文献資料閲覧室
	名誉教授室	名誉教授の交流の場
	喫茶・レストラン	教職員・学生・学外の研究者等の交流の場
2 階	国際交流ホール	式典、レセプション、会議、学会等
	迎賓室	来賓応接室
	大学文書館	研究室、情報資料室
地階	キャンパスアメニティゾーン	大学生協購買部等

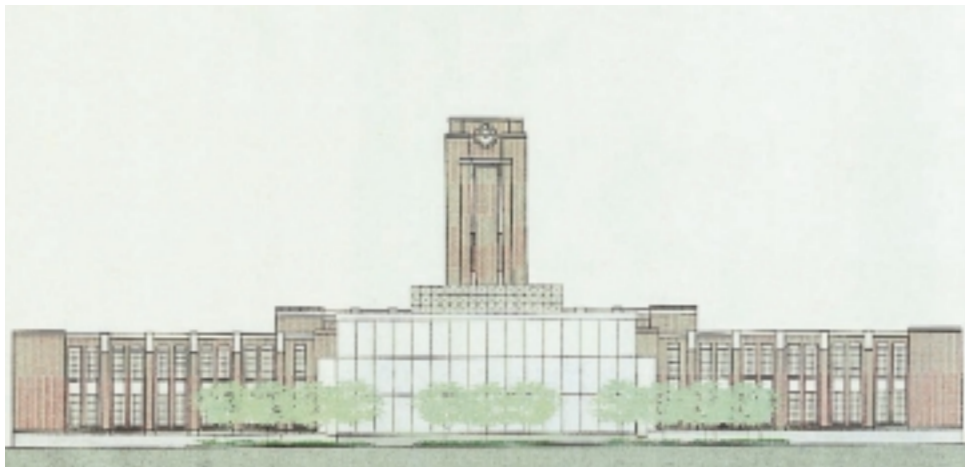
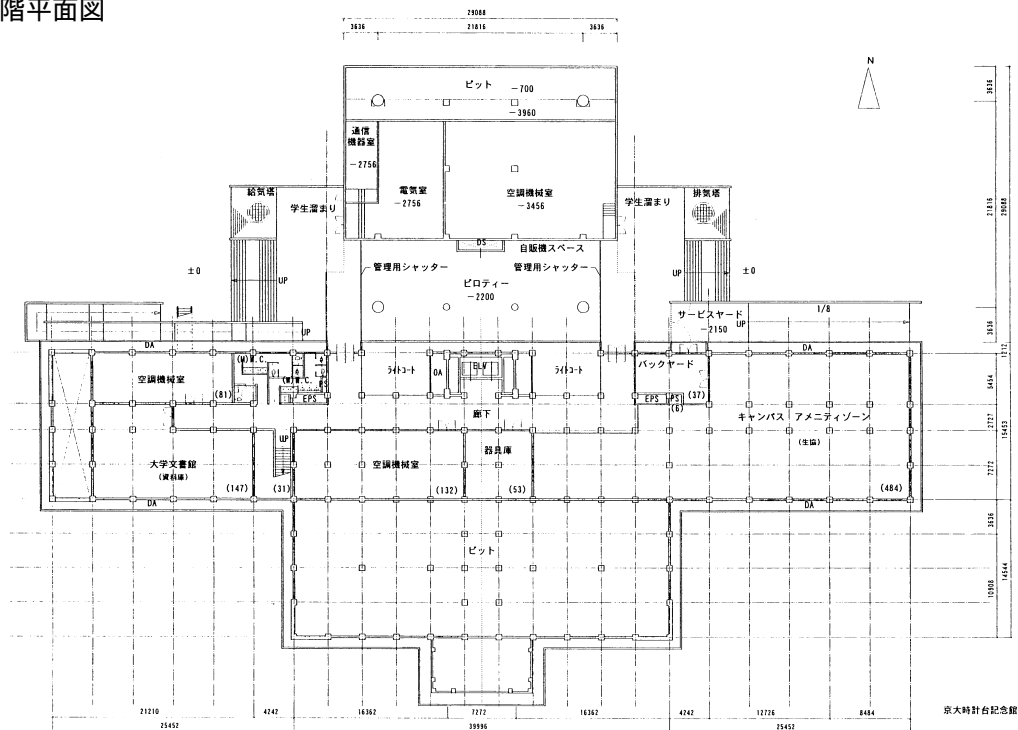
1 階平面図



2 階平面図



地階平面図



北側から見たイメージ図

部局長の再任

遺伝子実験施設長

清水 章遺伝子実験施設教授（ヒト・ゲノム解析分野）が、3月1日遺伝子実験施設長に再任された。任期は平成15年2月28日までである。

平成13年度入学者選抜学力試験の第1段階選抜状況

平成13年度入学者選抜学力試験の第1段階選抜が行われ、2月13日(火)、志願者に通知された。学部別の合格者数は次表のとおりである。

学 部		募集人員	志願者数	志願倍率	第1段階選抜		第1段階選抜の予告倍率
					合格者数	倍 率	
総合人間学部	前 期	110人	441人	4.0倍	424人	3.9倍	
	文 系	55	234	4.3	225	4.1	(注1)
	理 系	55	207	3.8	199	3.6	(注1)
	後 期	20	372	18.6	320	16.0	約12.0倍
文 学 部	前 期	190	567	3.0	566	3.0	約3.5倍
	後 期	30	379	12.6	301	10.0	約5.0倍
教 育 学 部	前 期	40	160	4.0	157	3.9	約3.5倍
	後 期	20	155	7.8	142	7.1	約5.0倍
法 学 部	前 期	320	883	2.8	883	2.8	約3.5倍
	後 期	20	438	21.9	345	17.3	約8.0倍
経 済 学 部	前 期	210	798	3.8	727	3.5	
	一 般	160	473	3.0	473	3.0	約3.5倍
	論 文	50	325	6.5	254	5.1	約5.0倍
	後 期	20	579	29.0	579	29.0	約7.0倍
理 学 部	前 期	271	953	3.5	910	3.4	(注1)
	後 期	30	1,016	33.9	972	32.4	(注2)
医 学 部	前 期	90	431	4.8	411	4.6	約4.0倍
	後 期	10	229	22.9	150	15.0	約10.0倍
薬 学 部	前 期	70	212	3.0	212	3.0	約3.5倍
	後 期	10	151	15.1	151	15.1	約10.0倍
工 学 部	前 期	874	2,396	2.7	2,396	2.7	約3.0倍
	後 期	101	1,073	10.6	806	8.0	
地 球 工 学 科	前 期	175	448	2.6	448	2.6	
	後 期	20	261	13.1	240	12.0	約12.0倍
建 築 学 科	前 期	80	241	3.0	241	3.0	
	後 期	10	127	12.7	75	7.5	
	A 選 抜	5	84	16.8	45	9.0	約8.0倍
	B 選 抜	5	43	8.6	30	6.0	約6.0倍
物 理 工 学 科	前 期	211	592	2.8	592	2.8	
	後 期	24	191	8.0	191	8.0	約8.0倍
電 気 電 子 工 学 科	前 期	117	328	2.8	328	2.8	
	後 期	13	136	10.5	78	6.0	約6.0倍
情 報 学 科	前 期	81	186	2.3	186	2.3	
	後 期	9	100	11.1	72	8.0	約8.0倍
工 業 化 学 科	前 期	210	601	2.9	601	2.9	
	後 期	25	258	10.3	150	6.0	約6.0倍
農 学 部	前 期	240	736	3.1	736	3.1	約3.5倍
	後 期	60	799	13.3	799	13.3	約10.0倍
合 計	計	2,736	12,768	4.7	11,987	4.4	
	前 期	2,415	7,577	3.1	7,422	3.1	
	後 期	321	5,191	16.2	4,565	14.2	

(注1) 総合人間学部前期及び理学部前期は、大学入試センター試験の5教科6科目の合計得点が800点満点中550点以上の者を第1段階選抜合格者とする。

(注2) 理学部後期は、大学入試センター試験の3教科3科目の合計得点が500点満点中300点以上の者を第1段階選抜合格者とする。

(注3) 下記外国学校出身者のための選考合格者が募集人員に満たない場合には、その数を法学部(後期)20人、経済学部(後期)20人の募集人員に加える。

[外国学校出身者のための第1次選考実施状況(外数)]

学 部 名	募集人員	志願者数(倍率)	第1次選考合格者(倍率)
法 学 部	20人	40人(2.0倍)	21人(1.1倍)
経 済 学 部	10人	16人(1.6倍)	13人(1.3倍)

博士学位授与式

1月23日火 午前10時30分から、京大会館において、長尾 真総長、両副学長をはじめ、各研究科長、事務局長出席のもと、博士学位授与式が挙行された。

総長から、各授与者に対し学位記（平成12年11月24日付、同13年1月23日付）が手渡された後、総長の式辞があり、午前11時40分終了した。

各研究科別内訳は次のとおりである。

研 究 科	平成12年11月			平成13年1月		
	課程博士	論文博士	計	課程博士	論文博士	計
文 学 研 究 科	2	2	4	3	3	6
法 学 研 究 科		2	2			
経 済 学 研 究 科		3	3	1	3	4
理 学 研 究 科	7	1	8	4	1	5
医 学 研 究 科	8	9	17	14	5	19
薬 学 研 究 科	1	2	3		4	4
工 学 研 究 科	5	11	16	6	9	15
農 学 研 究 科	6	12	18	2	7	9
人間・環境学研究所				3		3
エネルギー科学研究科	3	1	4	1		1
情 報 学 研 究 科		4	4	1	4	5
計	32	47	79	35	36	71

日誌

2001.1.1 ~ 1.31

1月4日 新年名刺交換会
 7日 総長，アメリカ合衆国を訪問（15日まで）
 16日 自己点検・評価委員会
 " Robert LUDAN在大阪・神戸アメリカ合衆国総領事他2名来学，総長及び関係教官と懇談
 17日 国際交流委員会
 18日 Andr  SIGANOS駐日フランス大使館文化参事官来学，総長及び関係教官と懇談
 19日 同和・人権問題委員会

20日 大学入試センター試験（21日まで）
 22日 環境保全委員会
 23日 博士学位授与式
 29日 総長，職員組合との交渉
 30日 評議会
 " 附属図書館商議会
 " 保健衛生委員会
 " 教育研究振興財団助成事業検討委員会
 31日 Yitzhak LIOR駐日イスラエル大使他3名来学，総長及び関係教官と懇談

訃報

このたび、^{なが た のぶひさ}長田信寿大学院工学研究科助手、^{あし ず たけお}蘆津丈夫名誉教授、^{もり た たかし}森田孝医学部文部科学技官、^{の がみ そいち}野上素一名誉教授が逝去されました。

ここに、謹んで哀悼の意を表します。

以下に各氏の略歴、業績等を紹介します。

長田 信寿 大学院工学研究科助手



長田信寿先生は、平成12年12月18日逝去された。享年32。

先生は、平成3年京都大学工学部土木工学科を卒業後、同大学院修士課程を修了された。平成5年から2年間（株）建設技術研究所に勤務された後、平成7年京都大学工学部助手に就任、同8年大学院工学研究科助手に配置換えとなられた。平成11年には京都大学博士（工学）を授与され、同年10月から1年間文部省在外研究員として米国アイオワ大学水理研究所に留学された。

先生は、河岸侵食を伴う河床および河道変動の数

値解析法、橋脚や水制など河川構造物周辺の複雑な3次元流れと局所洗掘の研究など河川工学、土砂水理学の分野で多大な成果を挙げられた。それらの成果の一部である「バングラデシュ国・メグナ川における河道変動問題への数値解析手法の適用」に関する研究で、平成10年度土木学会水工学論文奨励賞を受賞された。

また先生は、工学部および大学院工学研究科において学生の教育・指導に多大な情熱を傾けられた。

（大学院工学研究科）

蘆津 丈夫 名誉教授



蘆津丈夫先生は、1月18日逝去された。享年70。

先生は、昭和28年京都大学文学部独語文学科を卒業、同31年同大学大学院文学研究科博士課程を退学された後、大阪府立大学助手に就任された。昭和34年京都大学教養部講師、同助教授を経て、昭和53年同教授に就任、平成4年総合人間学部教授に配置換えとなり、文化構造論講座を担任された。平成5年退職により退官され、京都大学名誉教授の称号を受けられた。

本学退官後は、花園大学文学部教授を務められた。

先生のご専門はゲート研究で、特に近代科学に代りうるゲート自然観の重要性を説かれ、日本の代表

的なゲート学者となられた。日本ゲート協会理事、日本独文学会理事、ゲート自然科学の集い代表者、日独文化研究所理事などを歴任された。先生はフルトヴェングラー研究家としても名高く、多くの著訳書を残された。先生はさらにドイツとの国際交流にも多大の貢献をされ、ベルリンの旧大日本帝国大使館の建物を利用して、日独文化センターを設立するという偉業をなしとげられ、平成4年にはドイツ連邦共和国政府から功労勲章・一等功労十字章を授けられた。

主な著書に『ゲートの自然体験』、『文化における自然』、『フルトヴェングラー』、『ルターと親鸞』（独文）などがある。

（総合人間学部）

森田 孝 医学部文部科学技官

森田 孝氏は、1月27日逝去された。享年55。

同氏は、昭和46年1月から医学部に勤務され、以来30年余りの永きにわたり公用車の運転業務に尽力され、医学部のために多大に貢献された。

(医学部)

野上 素一 名誉教授

野上素一先生は、2月4日逝去された。享年91。

先生は、昭和9年東京帝国大学文学部言語学科を卒業後、同11年外務省より留学生としてイタリアに派遣されて国立ロー

マ大学文学部で学び、同14年にドットーレ・イン・レッテレ(文学博士)の学位を授与された。その後もローマに留まり、昭和17年には同大学文学部助教授に就任、同20年終戦により帰国、翌21年京都帝国大学文学部講師、助教授を経て、同29年教授に就任、イタリア語イタリア文学講座を担当された。昭和48年停年により退官され、京都大学名誉教授の称号を受けられた。本学退官後は、聖心女子大学、実践女子大学において教授を務められた。

先生は、イタリア中世文学の研究に力を注がれ、ダンテの『神曲』および『新生』の翻訳を出版された。ボッカッチョの『十日物語』も全訳されたうえ、イタリア学会誌に発表してこられた諸論文を基礎とした『ボッカッチョ研究』により、昭和37年に京都大学文学博士の学位を授与された。この他にもイタ

リアの言語、歴史、演劇など多分野にわたる著作や翻訳など、先生の残された業績は数多い。

また先生は、イタリア学会の創設やイタリア学会誌の発刊、『新伊和辞典』(白水社)の編纂、また(財)日本イタリア京都会館の創立などによっても、一貫してわが国におけるイタリア文化研究および日伊文化交流の発展と普及に大きく貢献され、日伊両国政府やダンテ協会をはじめとする様々な組織から数多く栄誉を受けられた。

(大学院文学研究科)

随想

論か、学か

名誉教授 山川 裕巳



終戦の年、私は旧制中学の二年生であった。その翌年三年生に進級した頃より、漠然とではあるが、いずれ将来は、この都の吉田山麓の地で学問をやりたいと思うようになった。だが、まさか化学を専攻することになるなどとは夢にも思わなかった。

私は小学生の頃は画家志望であったし、中学・高校時代は数学少年であった。また、終戦直後から新聞に度々掲載された、新型爆弾（原子爆弾）や湯川秀樹先生のU粒子に関する記事を読んで、物理にも興味をもった。それで、志望は数学か理論物理と決めていた。ところが、高校三年生の秋、父の経営する会社が倒産寸前となり、理学部・科学者への道を断念して工学部を受験せざるをえなくなった。ちょうどその頃、湯川先生のノーベル物理学賞受賞の発表があり、私は大きな挫折感を味わった。そして、昭和25（1950）年京都大学入学以来、停年退官まで45年間工学部に在籍することになった。しかし、客観的評価はともかく、私は私自身の学問的美的世界を構築する、という少年時代の夢を今日まで追いつけてこれたことを、この上なく幸せに思っている。

当時工学部では、二回生から各学科に所属していた。私は応用物理学科（後の数理工学科）志望であった。ところが入学して間もなく、「化学物理学」という初めて耳にする新しい学問分野が戦後急速に発展していることを知り、私は志望を工業化学科に変更した。そして三回生のとき、「高分子溶液論」という分野（化学物理学の一領域）で統計力学が盛んに使われていることを、中学の先輩から聞いた。それで卒業研究は、繊維化学科（後の高分子化学科）第一講座（櫻田一郎教授担任）で行うことに決めた。その四回生（1953年）の秋、国際理論物理学会議が日本（東京・日光・京都）で開催された。この高分子物理部門（京都）で講演するために、米国コーネル大学のP. J. Flory教授（1974年ノーベル化学賞受賞）が初来日したのである。その講演は、高分子溶

液論の中心問題である高分子鎖の排除体積効果に関するものであった。これが、その後の私の生涯の研究の方向を決定付ける契機となった。

私の最初の論文（単著）は、「物性論研究」（1956年5月）に掲載された「高分子稀薄溶液の統計力学．．．溶液中の高分子の拡がりについて」である。当時は、「素粒子論研究」という雑誌もあり、いずれも若手理論物理学者の活躍の場であった。これらは、なぜ、「学」ではなく、「論」なのか？湯川先生の言われるには、学はすでに立派な学問体系ができ上がっているものであるが、論は未完成のロマンにみちたものであると。

その後私は、1976年に「らせんみみず高分子鎖モデル」というものを提出した。これは、ガウス鎖極限（分子量無限大）と棒極限（極低分子量オリゴマー領域）を内挿する高分子鎖の一般化モデルである。同じ頃、欧米の高分子溶液論の理論は、ガウス鎖の排除体積効果に対するスケーリング則とくりこみ群理論を中心に展開されていた。極言すれば、これは高分子の個性が消えてしまう、分子量無限大の極限則でしかない。私の目には、このような普遍性のみを問題とする高分子の理論は、余りにも形骸化した、内容の薄いものに映った。湯川先生の言われる「骨皮理論」である。やはり、これは「高分子学」ではない。私が打ち立てようとしたものは、ガウス鎖の「高分子溶液論」ではなく、らせんみみずモデルに基づく、もっと内容の濃い「高分子溶液学」である。もちろん、この「論」と「学」の対比は、湯川先生の言われる意味とは異なる。

私は英文の論文や著書で、“polymer solution science”という言葉を使っている。これはもちろん、「高分子溶液学」の英訳である。だが、この「学」と「論」をヨーロッパ語で区別するのは難しい。また欧米の高分子学者には、その違いは分からないであろう。「高分子溶液論」のほうは、どう英訳すればよいのだろうか。

（やまかわ ひろみ 元工学部教授

平成7年退官、専門は高分子物性）

洛書

英語は一に声量，二にアクセント

丹羽 隆昭

自分の話す英語が全然通じないと言って嘆く日本人はざらにいる。なるほどネイティブ・スピーカーに"I beg your pardon?"を連発されれば、自信をなくしてしまうのも無理はない。しかしそういう状況は多くの場合、次の二点に留意することでかなり改善できると思われる。それは、声を十分に出すこと、そしてアクセント位置を守ることである。

多くの日本人は英語を話す場合、声が小さ過ぎる。自信のなさも手伝って、人によってはまるで蚊が鳴くような声になる。本来肉食民族の使用言語と草食民族のそれとの違いもあるが、英語を話す場合に必要な空気エネルギーは日本語のその3倍だとも言われる。まずは背筋をちゃんと伸ばし、しっかり腹から声を出すように心がけねばなるまい。そうすれば"I beg your pardon?"と聞き返されることも大幅に減ることだろう。また口や顎もそれなりにしっかり動かすべきで、英語をちゃんと話すには意外に体力が要るものなのだ。

もうひとつのポイント、アクセントは、まさに英語の命である。「アクセントぐらい・・・」と甘く

見てはならない。私自身の体験だが、初めて東京からシカゴに着き、タクシーで「アレゲニー航空 (Allegheny Airlines)」のターミナルに行こうとした時のことである(この空港は国際線と国内線のビルが遠く離れている)。運転手に「アレゲニー」と告げたところ、怪訝な顔付をする。仕方なく手帳を取り出して"Allegheny"と綴り、それを見せると、彼は"Oh, Allegheny!"(オウ、アレゲニ!)と叫んだ。忘れられぬ体験だが、かの運転手にとって「アレゲニー」と「アレゲニー」とは、互いにみじんも結びつかぬものだったのだ。早い話、「アレ」はどのようにもよく、「ゲニ」だけ聞こえればそれでよかったとさえ言えよう。同じような例は枚挙に暇がない。

平均的日本人の英語発音は、国際的に見てそれほど悪いものではない。まずは自信を持って堂々と大きな声を出し、アクセントの位置だけは守って話してみよう。他にももちろんいろいろと問題はあっても、この二点だけでも改善されれば、大抵は十分通じるはずである。

(にわ たかあき 総合人間学部教授)

資料

平成12年度教育実習実施状況

教育実習は教育職員免許法により、3単位の修得が義務づけられている。本学では事前指導として、実習参加学生に対して例年4月下旬にオリエンテーションを2日間行い(教育実習一般、民族教育、障害者教育、同和・人権教育)、更に各教科別に具体的な事前指導を行って教育実習に臨ませている。本学では附属学校を有していないため、教育実習は原則として学生の出身校(高等学校、中学校の何れも可)の協力を得て行っている。ただし、事情があって出身校で承諾を得られない場合には京都市立学校(高等学校、中学校、養護学

校)に依頼して実施している。

教育実習は府県により開始時期は異なるが、夏季休業期間を除いて5月上旬から11月中旬までの間に2週間が充てられ、全体の実習が終了した後、11月下旬頃に各教科別の事後指導が行われる。

単位認定は、教育実習校からの「教育実習成績報告票」、実習生が提出する「教育実習ノート」と事前及び事後指導の評価を勘案して教育学部において行っている。

平成12年度においては、全国33都道府県の国公私立高等学校115校、中学校19校、養護学校3校の

協力を得て実施した。

なお、本年度の特徴として、平成11年度から本格運用が開始された「介護等体験」制度（平成10年度以降の入学者で中学校普通免許状の取得希望者に義務づけられた制度で、盲・聾・養護学校で2日間、保育所を除く社会福祉施設等で5日間、計7日間の体験を行うことになっており、京都大学では2回生から実施することが可能。）の希望者が増大したことがあげられる。制度適用初年度（平成10年度後期）に2人であった希望者が、平成11年度では21人、平成12年度では61人（前期：35人、後期：26人）となり、学生1人について二つの窓口（特殊教育諸学校と社会福祉施設等）が必

要なことから、折衝すべき窓口は大幅に拡大した。そればかりでなく、体験に参加する学生数が増加するにつれて種々の問題点も指摘され、制度運用に困難を来している。来年度はさらに参加者が増大することが予想される。

また、本学の現状では教員免許状取得希望者（とりわけ中学校免許状取得希望学生）の把握が困難であるため、教育実習及び介護等体験を円滑に運営するには、各学部・研究科の協力がこれまで以上に重要となってくると考えられる。

関係各位のご理解と一層のご協力をいただき、制度運営にあたりたい。

（教職教育委員会）

1 学部、研究科別実習実施校（京都市立校及び出身校）

区 分	学 部 ・ 研 究 科 名														計
	総人	文	教	法	経	理	薬	工	農	人・環	工初級	情報	生命		
参加申込者	8	(7) 52	(2) 33	1	1	(6) 32	(1) 4	(5) 1 26	(5) 44	(2) 2	(2) 2	(3) 3	(1) 1	(34) 1 209	
京都市立中学・高校		1	3			1						(1) 1		(1) 6	
京都市立養護学校			5											5	
取りやめた者			1									(1) 1		(1) 2	
上記区分終了者		1	7			1								9	
出身中学・高校等	8	(7) 51	(2) 25	1	1	(6) 31	(1) 4	(5) 1 26	(5) 44	(2) 2	(2) 2	(2) 2	(1) 1	(33) 1 198	
取りやめた者		2	4					2	1		(1) 1			(1) 10	
上記区分終了者	8	(7) 49	(2) 21	1	1	(6) 31	(1) 4	(5) 1 24	(5) 43	(2) 2	(1) 1	(2) 2	(1) 1	(32) 1 188	
実習終了者	8	(7) 50	(2) 28	1	1	(6) 32	(1) 4	(5) 1 24	(5) 43	(2) 2	(1) 1	(2) 2	(1) 1	(32) 1 197	

（注）枠内()は大学院生， は科目等履修生で何れも内数。

2 校種別実施状況

区 分	学 部 ・ 研 究 科 名													計
	総人	文	教	法	経	理	薬	工	農	人・環	工初級	情報	生命	
中学校		(2) 6	(1) 4			(1) 4			3	(1) 1		(1) 1		(6) 19
高等学校	8	(5) 44	19	1	1	(5) 28	(1) 4	(5) 1 24	(5) 40	(1) 1	(1) 1	(1) 1	(1) 1	(25) 1 173
養護学校			(1) 5											(1) 5
合 計	8	(7) 50	(2) 28	1	1	(6) 32	(1) 4	(5) 1 24	(5) 43	(2) 2	(1) 1	(2) 2	(1) 1	(32) 1 197

（注）枠内()は大学院生， は科目等履修生で何れも内数。

話題

京都大学生命情報シンポジウム「バイオインフォマティクスの新展開」開催

ヒトゲノムの全塩基配列が決定され、プロテオミックスやDNAチップ法など先端的で高度な解析技術を駆使するポストゲノムの機能解析の時代になった。京都大学は、情報学研究科と生命科学研究科を中心に、21世紀の情報・生命科学（バイオインフォマティクス）を担う人材を養成することが急務と考えている。

本シンポジウムは、1月25日（木）、京大会館において、21世紀における「バイオインフォマティクスの新展開」を主題に、開催された。当日は、長

尾 真総長の挨拶に続き、この分野の指導的研究者である北野宏明（ソニーコンピューターサイエンス研究所）、宮野 悟（東京大学医科学研究所附属ヒトゲノム解析センター）、松原謙一（（財）国際高等研究所）、金久 實（京都大学化学研究所）、近藤 滋（徳島大学総合科学部）、角田達彦（理化学研究所遺伝子多型研究センター）の諸先生方による講演があり、教官、学生、企業等から約200人の参加者が熱心に討論を行った。

（大学院情報学研究科、大学院生命科学研究科）

京大病院で「新春のつどい」開催

京大病院は、1月30日（火）夕方、外来棟1階のアトリウムホールに特設ステージを設け、「新春のつどい」を開催した。

本田孔士病院長の挨拶に始まり院内学級児童生徒による歌と演奏、新疆ウイグル自治区からの留学生で本学大学院理学研究科アヒマデザイン・アブドレイムさんと文学研究科サリナ・イブラインさんの御夫妻によるウイグル民族舞踊、ボランティアグループによるコーラスなど多彩なプログラムで実施された。

この間、ウイグル民族舞踊の舞踊指導では本田病

院長も飛び入りで加わったり、参加者全員での合唱もあったりと終始なごやかな雰囲気ですべてのプログラムは進み、吹き抜けのアトリウムホールの2階、3階からの立ち見も含め約300人の入院患者さんから盛んな拍手が送られていた。

このつどいは、入院患者さんへ“憩いのひととき”を提供するため平成7年度から毎年、事務部、看護部による実行委員会が企画している手作りイベントで、京大病院の恒例行事となっている。

（医学部附属病院）



院内学級児童生徒による歌と演奏



留学生によるウイグル民族舞踊

お知らせ

本部構内におけるオートバイの通行について

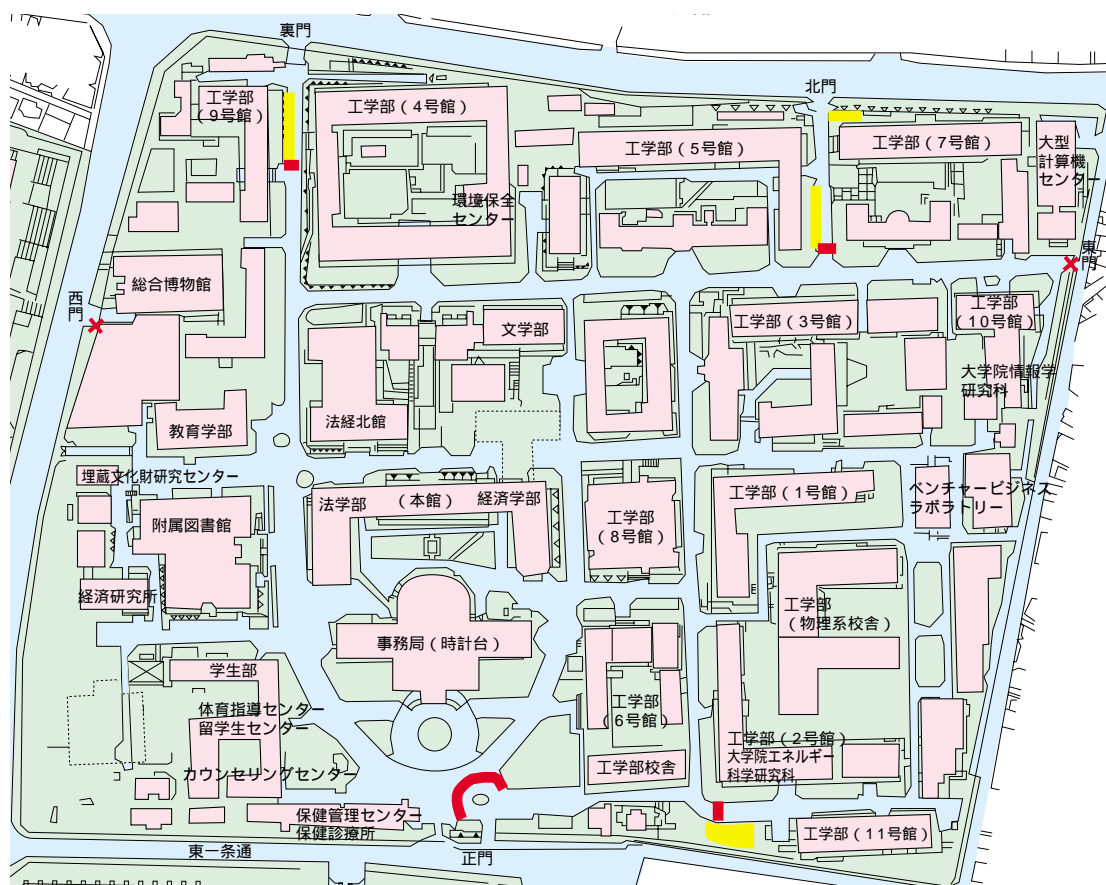
本部等構内交通委員会

本部構内をオートバイで走行することは、その騒音が授業の妨げになり、また非常に危険であるため、平成13年4月12日から走行を禁止します。

なお、本部構内におけるオートバイの取扱いは、下記のとおりといたしますので、ご協力願います。

記

- 1 オートバイの入構できる門（印）
正門，裏門，北門（東門，西門は入構禁止）
- 2 オートバイ走行禁止境界線
下図の走行禁止境界線の内側は、全てのオートバイの走行を禁止
原動機付自転車（50cc以下）
エンジンを止めて押して歩き自転車駐輪場等に駐輪
- 3 オートバイ専用駐輪場
正門，裏門，北門付近に設置
自動二輪車（50ccを超えるもの）のみ



黄色は、オートバイ専用駐輪場
赤色は、オートバイ走行禁止境界線